

【3】小佐々地区ってこんなまちです

(海光るまち・小佐々地区の地域福祉の歴史)

平成18年3月31日に佐世保市と合併した小佐々地区は、日本本土最西端に位置し、「海光るまち」として知られています。

東は佐々町、北は鹿町町と隣接し、南及び西は平戸海峡に面しており、農業・漁業などの振興を核に、景勝地・冷水岳や日本本土最西端の地などの観光資源を生かしたまちづくりが進められてきました。

福祉分野では、平成16年に「赤い羽根共同募金」の35年連続目標達成地区として長崎県共同募金会から表彰を受けるなど、地域のつながり・支え合いの意識が高く、そのことが地域福祉の活動にもつながっています。

昭和55年に「小佐々町公民館」、昭和59年に「小佐々町高齢者コミュニティーセンター」が、生涯学習や福祉活動のための拠点として開設されたことにより、老人クラブや身体障害者福祉協会などの福祉団体の組織化や活動強化が図られました。各団体は、会員の福祉向上を基本としながら、地域への積極的な奉仕活動も推進しています。

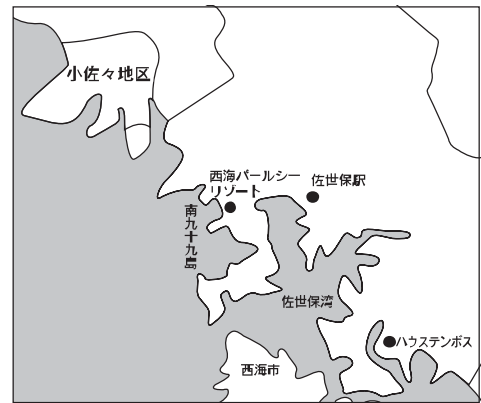
昭和57年には、ひとり暮らし高齢者の見守りや健康づくりを目的とした「ふれあい食事会」が、民生委員児童委員協議会と地域婦人会を主体としたボランティアグループ「ふれあい」により開始されました。これは現在も続いているボランティア活動の草分け的存在です。

その後、ボランティア活動の普及、ボランティア人材の育成により、本の読み語りグループ、防犯パトロール隊など、さまざまな団体が結成され、福祉の一翼を担っています。

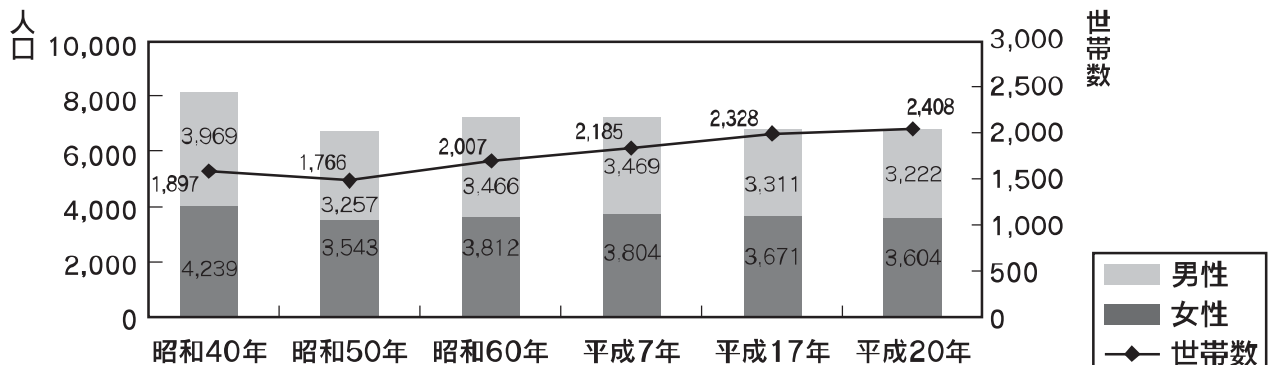
地域における支え合いも次第に広がり、高齢者のふれあいいきいきサロンや3世代の交流会も活発に展開されるようになりました。

佐世保市となった現在でも、市内のボランティア団体やNPO団体との結びつきを強め、住みよい地域づくりのためにそれぞれの人々・団体が連携して活動しています。

〔佐世保市における小佐々地区の位置〕



(小佐々地区の人口推移) ※いずれも10月1日時点の統計資料



（小佐々地区“わがまち自慢”）

小佐々地区には“自慢”がいっぱい！その一部を紹介します。

美味・小佐々いりこ

小佐々町はいりこの原料となるイワシ類などの好漁場で、古くから豊富に獲れるカタクチイワシやマイワシを原料に、いりこの生産が全国一の生産を誇るまで盛んになりました。今では「小佐々いりこ」と呼ばれるようになり、美味しいいりことして全国で愛用されています。

「小佐々いりこ」は近海で獲れた魚を、鮮度の良い状態のまま海水で茹で上げ乾燥させることで、美味しく、風味豊かにできあがります。

日本の伝統の味と香りはもとより、近年は美容と健康のための天然の健康食品として賞味されています。



大悲観大文字

小佐々地区東部の大悲観公園内には、古来、平戸八景として知られている「大悲観大文字」があります。高さ20mの巨岩に「大悲観」の3文字が彫っており、1文字に米俵1俵が入るといわれています。

第10代平戸藩主松浦肥前守源朝臣熙（ひごのかみ ちねとのねすむね 観中公）は、かんちゆうじゆう 長崎番所諸事心得として平戸と長崎の間を往復する途中、1830年に、ここに立ち寄り、この奇岩に大文字を彫らせることを思い立ちました。観中公は、当時諸大名の間でも、屈指の書家として知られていたのです。



景勝地・冷水岳公園

冷水岳公園は、九十九島が一望できる展望台や野外ステージ、物産館などが整備されており、多くの観光客が訪れています。展望所からの眺めは絶景で、空気が澄んだ日には五島列島まで遠望できます。

昭和30年3月には、この冷水岳を含む九十九島一帯が西海国立公園の指定を受けました。

平戸が生んだ詩人、故藤浦洗先生の「天と地の和ここに極まるを見る」という、歌碑もあります。

なお、この冷水岳は、ツルやワシタカなどの渡り鳥の通過点として、愛鳥家の間でも有名です。



日本本土最先端・神崎鼻公園

東経129度33分・北緯33度12分にある神崎鼻には、日本本土最西端の碑があります。

平成元年12月に国土地理院の人工衛生による正確な経緯測量で、本土最西端が確定したのを受け、旧小佐々町で公園化に取りかかり、最西端の碑や日本地図を模した直系11mのモニュメント、芝生広場などを整備しました。

波静かな西海の海に抱かれた景勝の地で、はるか北西の海上に五島列島、平戸島を望むことができます。

なお、当地を訪れた人には、小佐々行政センターにおいて「日本本土最西端訪問証明書」を発行しています。

